

## L11a Mars 2007–2008: Report from a Cooperative Observation Network

中串孝志 (京大理)、安達誠、伊賀祐一 (月惑星研究会関西支部)

我々はこれまで、プロアマ連携観測ネットワークによる火星観測から得られた火星面諸現象の総括の報告を、2003年接近期 (Nakakushi et al., 2004 & 2005, PASJ) および 2005–2006 年接近期 (Nakakushi et al., 2006, 日本地球惑星科学連合 2006 年大会) について行ってきた。今回は 2007–2008 年接近期についての速報を行う。

今回の 2007–2008 年接近期の火星は、最大視直径 15.9 秒角となるのが 12 月 19 日、衝 (太陽–火星–観測者のなす角が最小) は 12 月 24 日であり、この頃はほぼ火星北半球春分 / 南半球秋分に当たる。今期最初の観測は 2007 年 1 月 24 日のもので、視直径 4.1 秒角であったにもかかわらず、有意なアルベド模様が捉えられており、アマチュア界の観測機器 / 技術の高さを示している。2007 年 11 月末の時点で既に 2500 点を超えるデータが集まっている。

全体的に、気象条件に悩まされた観測が多く、視直径もそれほど大きくならないため、前 2 期のように成果は挙っていない。しかし、日本が梅雨のため観測困難な時期に起こったダストストームが、アメリカを中心に観測され、国際ネットワークの強みを示す事となった。このダストストームが地球から観測されたのは 6 月 23 日で、翌 24 日には南半球を中心に 10 カ所で発生し、広い範囲を覆うダストストームへと発展した。最終的には火星全面を覆った。2001 年の大ダストストームのときには長期間に渡って滞留していたが、今回のダストストームは比較的早く沈静化し、8 月初旬には地表面が見えるようになってきた。他にも続々と極冠・極雲などについての情報が入って来ている。その最新情報を報告すると共に、今後将来的に持続可能なプロジェクトとして運営していくための必要条件についても議論したい。